

特集

異文化交流

金 珍澤

国際交流推進委員（2016－2019年度）

Cross-cultural exchange

Jintaek KIM

Membership of the International Exchange Committee (2016-2019)

【要旨】 グローバル化が進み、日本国内の外国人観光客、労働者、留学生の数が増加している現代において、日常の様々な場面で外国人と接する機会が増えてきている。医療現場においても外国人患者数は増えてきており、英語によるコミュニケーションをはじめ思想や宗教、生活習慣、医療体制の違いについての理解が必要となってきた。本学の自校教育の一つである「異文化交流」では、短期間の研修を通じて学生が異文化に触れる機会を設けており、異文化への好奇心や各国の医療事情への関心を高める契機となっている。

キーワード： 自校教育、海外研修、外国人患者

Abstract: In today's world, where the number of international tourists, workers, and students in Japan has been rising due to globalization, opportunities to interact with foreigners in various daily situations accelerate. Since the number of foreign patients is increasing in the medical field as well, it is necessary to understand the differences in ideas, religions, lifestyles, and medical systems and to communicate in English. In the "Cross-cultural exchange", which is one of our original educational goals, students are provided opportunities to come into contact with different cultures through short-term training sessions, and to increase their interests in other cultures and the medical conditions in different countries.

Keyword: original educational goals, training abroad, foreign patients

【はじめに】

日本におけるグローバル化は21世紀から急速に進んでおり、在留外国人の数だけを見ても令和元年6月末現在においては282万9,416人と過去最高を記録している。同時期の福岡県福岡市の人口が約159万人であることから、国内の外国人を集めると都市を形成できるほどの人数で、在留外国人の多さがうかがえる。在留資格別では、永住者が約78万人、技能実習が約36万人、留学が約33万人、特別永住者が31万人であり、また、国籍・地域数は195カ国、上位5カ国は中国、韓国、ベトナム、フィリピン、ブラジルが占めている。このように様々な背景と目的を持つ外国人が増加することで日本人が日常生活の中で外国人に接触する機会が増えている¹⁾。

医療従事者においてもそれは例外ではなく、平成27年度の厚生労働省による244の病院での外国人患者受け入れ数調査では、年間20名以上の外国人患者を外来で受け入れた施設の割合は46.7%、内500名以上を受け入れた施設は9.8%を占めていた²⁾。日本国政府は、「明日の日本を支える観光ビジョン構想会議」において、訪日外国人旅行者を2020年に4000万人、2030年に6000万人とする目標を掲げていることから、今後も外国人患者数の増加は予想され、各病院施設においては外国人患者受入体制の強化が必要となるであろう。

外国人患者受入において重要なのは各言語への対応であるが、それ以外にも思想や宗教、生活習慣、医療体制の違いについての理解や対応も必要である。ある程度の英語力を身につける、各言語の通訳を置くことで患者との意思疎通は可能であるが、各患者に関わる文化や風習についても学んでおくことが

治療をスムーズに進めていく上で重要となっていくだろう。例えば、イスラム教徒の場合はハラームフードが定められており豚肉やアルコールの飲食が禁止されている。そのため消毒用エタノールの使用や院内で提供される食事について大なり小なり抵抗を示す患者もいる。

本学実施のアンケート調査では、大学一年生の多くが「海外に行ったことない」と回答している。異文化交流講義では、日本から最も近い韓国への訪問を異文化を知る第一歩としており、当講義をきっかけに様々な国やその文化、グローバル化、国際協力、世界平和について興味を持ち、将来的に何らかの形で医療現場で活かして頂きたいと思う。本稿では「異文化交流」講義の詳細を紹介する。

授業概要

純真学園大学では、現代社会において求められる医療職者の育成を目指して「純真学」を開講している。4学科合同カリキュラムとして6つの科目で構成され、学園訓である「気品」「知性」「奉仕」の精神を通して、医療職者に必要な人間力の醸成を目的としている。異文化交流はその6科目の一つであり、実践的な外国語能力養成と海外の医療文化・価値観に触れることを目的に短期の海外研修を実施している。語学研修あるいは本学 MOU 締結大学での研修を通じて、学生はグローバルな視点に立って歴史や異文化を理解し、国内外の社会情勢・医療・歴史に対する強い好奇心と学習意欲を高める。

到達目標

1. 海外への短期研修を通じて海外の学生や教員等と交流を深め、様々な考え方や価値観のあることを認識し、異文化について啓発できる。
2. 学生時代に外国の医療及び文化を体験することで国際的な視野を広げることができる。
3. 日本の良い部分を再認識することで地域貢献への足掛かりを探ることができる。

表 1. 「異文化交流」シラバスの概要

回	授業内容
1	異文化交流に関する総合オリエンテーション
2~6	異文化(アジア地域)を学ぶために海外の大学および病院を短期訪問し、海外の学生、教員および病院の職員との交流を行うと共に研修を行う。
7	研修後、異文化交流に関する分析と見聞拡大への考察について討論を行う
8	まとめ

授業展開

授業は、オリエンテーション・海外研修・討論会の3部で構成される。夏休み期間中に学生は本学が用意した研修プログラムに参加する、もしくは個人で探してきた語学研修等（本学の国際交流推進委員会で研修先としての承認が必要）に参加する。

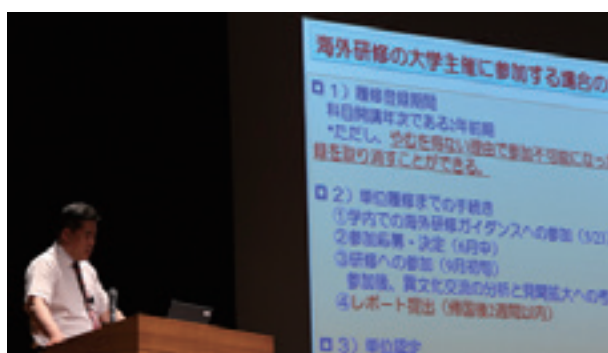
「異文化交流」授業内容

＜異文化交流に関する総合オリエンテーション＞

「異文化交流」は2年次における選択必修科目であり、学生は「ボランティアとキャリア形成」の科目が本科目のどちらかを選択する必要がある。1年次に海外研修に参加すれば2年次に単位認定されることから、研修への参加者は1年生が多い。毎年6月頭の総合オリエンテーションでは、国際交流推進委員長から単位認定の流れや研修概要について説明があり、その後に昨年度研修参加者（2年生または3年生）

による研修内容や感想、学びについてのプレゼンテーションが行われる。

1年生は全学科全員がこの説明会に参加し、海外研修・海外留学についての意識アンケート調査に回答する。2019年度アンケート調査の結果では、留学したい国ベスト3は1位：韓国、2位：アメリカ、3位：オーストラリアであった。2019年は日韓の政治的関係が冷え込んでいる時期であったが、説明会参加者の61%が海外留学先として韓国を選んでいった。また、留学を検討するにあたって課題となっていることとしては、1位：留学費用、2位：生活・授業受講に必要な語学力、3位：勉強についていけるか不安、という結果で、留学に対する願望はあっても資金的な問題や学力不足への不安から諦めている学生もいることが考えられた。



単位認定までの流れを説明する具然和委員長



春海保健大学校での晩餐会の様子を発表する学生達

国際交流推進委員会ではアンケート調査結果から研修費用の学生負担割合について検討している。研修は3泊4日で朝昼晩の食費や施設見学・観光地へのバスチャーター代、飛行機代、ホテル宿泊代全て込みで、学生にとって無理のない金額に設定している。

<韓国短期海外研修>

本学は韓国の5大学（春海保健大学校、忠南大学校、仁済大学校、圓光保健大学校、成均館大学）とMOUを結んでおり、隔年でソウルエリアと釜山エリアに分けて訪問を実施している。ここでは2018年に釜山エリア（春海保健大学校と仁済大学校）を訪問した例を紹介する。

春海保健大学校は、韓国南東部の蔚山広域市に位置する私立専門学校である。看護学科、歯科衛生科、作業療法科、放射線科、幼児教育科など12の学科を持ち、病院も運営している³⁾。仁済大学校は、慶尚南道金海市に本部を置く、研究と教育インフラ、グローバル人材育成を通じて国家と社会から認められる名門私学で、学部生数8,896人、大学院生数1,108人、8つの大学と1つの大学院、4つの特殊大学院を持つ⁴⁾。ソウル白病院、釜山白病院、海雲台白病院など6つの付属病院を有する。

研修は9月に3泊4日で実施し、スケジュール概要は表2の通りである。学生は研修日までの間に語学の勉強を進めておく。例えば、韓国語にしても全く話せない学生もいれば、独学で日常会話ができる程の学生もいて、語学力は様々であるが、最低でも簡単な自己紹介や挨拶はできるように課題を課している。研修プログラムの中には「観光」や「自由時間」も設けている。買い物で値段を知りたいとき, 얼마예요? 「オルマエヨ」, トイレの場所を知りたいとき, 화장실 어디예요? 「ファジャンシルオディエヨ」など様々なシーンで現地の言葉が必要になることがある。研修の際は日常会話集や辞書などを持参するように勧めており、言葉が通じない環境においても意思疎通する機会を与えている。

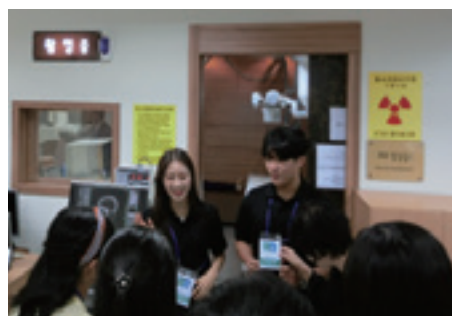
表2. 短期海外研修（韓国）スケジュール

日付	時間	
9月9日		福岡空港→金海空港(釜山) 慶州・仏国寺 ホテル宿泊
9月10日	9:30- 13:00- 14:00- 15:00- 16:00- 17:00-	龍宮寺→昼食→春海保健大学校へ移動 春海保健大学校 歓迎会 キャンパス内見学 体験実習 歓迎パーティー ホテル宿泊
9月11日	9:30- 10:30- 13:00- 16:00-	仁済大学へ移動 仁済大学での交流 仁済大学キャンパス内見学 仁済大学病院見学
9月12日	9:00-	龍頭山公園→国際市場→チャガルチ市場 金海空港→福岡空港

春海保健大学校の放射線科見学では、学生はMRI、CT、マンモグラフィー、超音波検査の装置等の説明を韓国の学生から受ける。本学学生参加者の多くは1年生で放射線装置に対する知識が浅い中で説明を受けることになるが、X線装置でカセットの上にコインを置いて撮影したり、CT装置を動かしたりと様々なことを体験しながら学ぶことができる。晩餐会（学術文化交流会）では、本学学生と韓国の学生が同じテーブルにつき、食事や余興を一緒に楽しみつつ、英語やスマホの翻訳アプリを使ってコミュニケーションを図り親睦を深める。



春海保健大学校キャンパス
日本語での横断幕から歓迎感が伝わってくる



大学内の撮影装置について説明を受ける学生達



本学学生が骨密度測定を体験している様子



文化交流会にてダンスを披露する本学学生と筆者

仁済大学では図書館長である朴 載燮（パク ジェソプ）教授のご案内でイ・テソク神父記念室を見学する。イ・テソク神父は韓国のシュバイツァーともいわれ、医者として安定した生活が約束されていた

にも関わらず神学院に入り司祭の道を進まれた方である。アフリカ南スーダンのトンズでの宣教活動や学校の建設、教育、医師としての活動に関する資料が収められており、48歳でがんて亡くなるまで南スーダンに捧げた生涯について知ることができる。見学を終えた学生からは、神父の当地での献身的な活動に感銘を受け、医療人を目指す自分もその精神を見習いたいという感想もあった。

仁済大学付設の産業保健センターは、作業環境測定と労働者の健康診断を通じて快適な作業環境づくりと労働者の健康の保護を目的としている。学生は胸腹部立位X線撮影装置や血液検査室内の装置等を見学し、リハビリテーション関連の複数の装置や機器を見学・体験した。



仁済大学イ・テソク記念室を見学する学生達



仁済大学産業保健センターにて説明を受ける学生達



電気治療器を体験する本学学生

< MOU 提携大学から来校 >

毎年冬には MOU 提携大学の学生及び教員の本学へのご来校がある。本学4学科（看護学科・放射線技術科学科・検査科学科・医療工学科）の各施設を見学して頂き、また、食事会やプレゼント交換などのイベントを通じて本学学生・教員との親睦を深める。2018年度には春海保健大学校から学生19名、教員3名の訪問があった。韓国の診療放射線技師養成校は3年のプログラムであり、履修科目は臨床系のウェイトが大きい。そのためか、施設見学の際は基礎系の講義や実験に関心示す学生が多くみられた。



春海保健大学校の教員・学生と本学教職員で記念撮影



放射線計測学実験を視察する韓国の学生達

< オーストラリア研修 >

ウェスタンシドニー大学は、オーストラリア・ニューサウスウェールズ州北西部にメインキャンパスを持つ、学生数が約5万人弱、主要学部として医学、看護、社会福祉、教育、心理学、アート、ビジネス、エンジニアリングなど13の学部から成り、設立より30年の新設大学ながらグローバルに評価される大学である⁵⁾。本学では国際交流推進委員会の設置初期には韓国、台湾、中国などアジア圏の大学との MOU 締結を進めてきており、学生の海外研修先もアジアの国々が主であったが、2016年に APC アジアパシフィックカレッジ（米国）と MOU 締結、そして2019年にウェスタンシドニー大学（オーストラリア）と MOU 締結により、英語圏の国々への留学も数居が低くなった。

2019年8月に本学学生4名がオーストラリア語学研修に参加した。3週間のプログラムで内容は表3に示

すように、平日は午後2時まで英語授業があり、その後は観光地を巡るツアーや街で買い物をする時間などが設けられている。宿泊はホームステイ形式であり、朝・晩の食事付である。ホストファミリーの生活を目の当たりにすることで日本とは異なる文化や習慣の違いを感じとることができる。参加した学生の多くはレポートの中で、大都市に関わらず街の雰囲気が全体的に穏やかであり、人々もおおらかであるという感想を書き述べていた。また、平日と土日の ON-OFF が明確で、平日は残業しないように朝早く来て一生懸命働き、土日は家族との時間を大切にしているこのようなライフスタイルを見習いたいという意見も多く見られた。

語学力の面では、ネイティブの環境といえども3週間で劇的に語学力の向上を期待できるものではないが、参加者の中には直接的な語学力向上の他に収穫があったようである。この学生はラオスから来た留学生と話す機会があり、「Where are you from?」と問いかけたところ相手が出身地を答えただけで会話を発展できずに即時に会話が終わってしまったこと、また、放課後に担当の先生が車で送って下さった時に車内で沈黙が続いてしまったことなど幾つか気まずい経験をした。これらの経験から、流暢に話すことは出来なくとも単語を並べるなどして伝えようとする、自分から話しかけることが重要であることに気づき、残りの研修期間は積極的にコミュニケーションをとるように心がけたとのことである。

また、距離感の短さに驚いたという意見もあった。ホームステイ先のホストファミリーは4人家族、2人の息子がいて、本学学生はシドニーに着いた1時間後にはホストマザー友人の車で息子のサッカーの試合の応援に行くことになる。学生は初対面という事もあり一定の距離感が心の中にあったが、現地の人々はまるで昔からの知り合いの様な距離感で接してくるので初日はかなり困惑する。しかし日が経つにつれて違和感はなくなり、学生も同じような距離感で他人と接するようになったとのことである。医療従事者は多くの初対面の患者と向き合うことになるので、今回の研修での経験が、自ら積極的に心を開いて相手と向き合う良いきっかけとなったようである。

表3. オーストラリア研修スケジュール

		Sun.	Mon.	Tue.	Wed.	Thu.	Fri.	Sat.	Sun.
1Week	9時-14時	シドニー到着	居眠り 体験	英語授業					
	14時以降	ホームステイ先到着 休憩	オリエンテーション (携帯電話、オパールカード)	Sydney Olympic park ツアー	保健学部 キャンパスツアー	Self study	campus activities	週末体験 Port Stephens	自由時間
2Weeks	9時-14時								
	14時以降		Darling Harbour	WSU campus tour Liverpool	Self study	Fit at Mall Shopping	campus activities	週末体験 Blue Mountains	自由時間
3Weeks	9時-14時								
	14時以降		Self study	Watson's Bay & Bondi Beach	campus activities	Art gallery of NSW	graduation		



2019年5月14日
ウェスタンシドニー大学（オーストラリア）とMOU 締結



語学研修を終えた本学学生達

<討論会>

研修に参加した学生は、次年度後期に開かれる討論会で研修内容について発表する。訪問した大学・病院での研究設備や医療機器がどうであったか、先方の学生達とどのようにコミュニケーションをとったか、観光や食事等を通して感じた異文化、その他学んだことについて纏める。さらには訪問国における医療従事者養成課程の違いや医療制度の違いについて分析する。討論会で学生は資料スライドを基にプレゼンテーションを行い、日本や各国の医療が抱える問題について提議し、問題解決に向けて身の回りのことや地域貢献として何ができるかを討論する。

授業評価

2019年度の韓国短期海外研修（成均館大学、延世大学付属病院がんセンター）への参加者は50名、オーストラリア研修（ウェスタンシドニー大学）への参加者は4名であった。講義最終日に行った授業評価アンケートでは、「様々な文化や価値観を理解する意義を感じましたか」という問いに「非常にそう思う」「そう思う」と回答した学生は97.7%、「国際的な視野を広げることができた」の問いには97.7%、「日本の文化や医療を見つめ直すことができた」には95.5%のポジティブな回答があり、非常に高評価であった（巻末資料参照）。また、自由な感想や意見（下図）においても全体的にポジティブであった。

2019年の夏といえば、日本政府による韓国のホワイト国除外、韓国の市民団体を中心とした日本製品の不買運動、韓国政府による GSOMIA（軍事情報包括保護協定）の破棄が起こるなど両国間の関係が冷え込んでいる時期であった。韓国への研修を予約していた本学学生の中でもキャンセルが出たものの数名であった。政治的不安はあるものの、異文化に触れてみたい・韓国の学生と交流したいという熱意あふれる学生が多かったと思われる。その他、語学力の差についての感想も幾つか見られた。研修先で韓国の学生には日本語や英語を流暢に話し通訳を行う学生も複数名いて、そのような学生の存在が本学学生にとってかなりの衝撃であったようで、学びへの姿勢や勉強意欲の違いが良い刺激となったことが感想から窺えた。

<授業評価アンケート> 質問12 この授業(研修及び学内講義、発表)に対する感想・意見・要望を自由にお書きください。

元々韓国に興味を持っていて、参加させてもらいましたが、本当に楽しく学ぶことが出来て貴重な体験が出来ました！日本と韓国の文化や人間性、食事、学びへの姿勢など、たくさんの違いを感じ、改めて思うことが沢山ありました。交流を通して実際に友達を作ることができ、同じ看護学生として話をする事で視野が広がった。韓国の学生と交流することができ改めて勉強したくて学校に来ているという意識の違いを感じた。海外に行くことによって日本との比較をすることができるので、参加して良かったと思いました。楽しみながらまなぶことが出来て、自分を見つめ直す研修にもなったことが良かったです。実際に海外に行き、文化に触れる事はなかなかできない経験なので良かった。とても貴重な体験ができました！異文化交流を選択して良かったです！今回初めて海外に行ったが非常に貴重な体験をすることができた。昨年のような、学生との直接的な交流の時間がほしかったです。自分たちの旅行では行くことができないところに行けて良かった。韓国の方たちの勉強意欲は凄く、負けてられないなと感じた。まとめるのはプレゼンテーションではなくポスターが良かった。異文化交流を経験することができたので良かったです。日本と違った文化がいろいろ知れて良かったです。韓国の学生と交流することができてとても良かった。韓国と日本の違いや勉強の意欲が高まりました。韓国の学生と交流できて良かったです。韓国の方と会話が出来て楽しかった。研修先が他に多くあればなと感じた。とてもいい経験ができたと思います。また研修いってみたいと思いました。もっとハキハキ発表したかったです。異文化交流ができて楽しかった。もう少し金額を安くしてほしい。すごく良い影響になった。他の国も行きたいです。非常に良かった！楽しく学びました。3週間とても多くの事を学ぶ事ができました。自分を見つめ直すいい機会になりました。(ウェスタンシドニー大学研修者)

課題

当科目は授業評価アンケートで高評価を得ているが一方で課題もある。一つは研修時期が夏休み期間中であるため、訪問先の大学も夏季休暇で学部生数が少ないことがあり、代わりに大学院生に対応して頂く場合がある。このため、同年代の学生と交流したかったという声も少なからずある。そして二つ目は、今後も大きな課題となるであろう、感染症の問題である。2018年の韓国プサンエリア研修時には仁済大学海雲台白病院を訪問予定であったが、訪問直前に MERS 感染患者が確認されたために急遽別の産業保健センターの見学へと内容が変更となった。この変更により、大病院にあるガンマナイフやダビ

ンチ、リニアックなどの最新の医療機器を学生に見せられなかった。さらには2019年末からのCOVID-19パンデミックにより、今後は研修に行くこと自体が困難で、如何にして遠隔地から外国人学生と交流し異文化を学ぶか模索していく必要がある。よく授業や会議で利用されるZoomやWebexなどのアプリを用いてWeb通信する、ビデオレターの交換などから検討していくことになると思われる。

おわりに

日本における少子化・外国人労働者への依存が進む中で、医療現場において外国人患者に接する機会の増加は避けられず、外国人患者に対応していく上で広い視点に立ち自ら能動的に意思疎通ができる医療職者の育成が求められる。

外国人患者が医療機関受診において経験するコミュニケーション・ギャップとしては、ある調査によると「日本語能力の不足」、「外国人に対する偏見への恐れ」、「文化・慣習の違い」などが示されている⁶⁾。また、在日外国人を対象とした別の調査研究によると、日本の医療機関を受診して実感した異文化体験の様相として「受診システムが分かりにくい」、「自分の病状や主張を正しく伝えるのが難しい」、「壁をつくられて向き合ってもらえない」、「患者1人ひとりの文化的背景が注目されない」などが挙げられている⁷⁾。これらの調査結果から、外国人患者対応の大きな隔たりとして、言語・偏見・文化的背景の3つがあると考えられ、これらの隔たりを超えるのは一朝一夕では困難であるが、まずは国や人々、文化に興味を示し行動し続けること、そして、外国人も同じ人間で人間愛があって日本人と繋がりを求めていることへの理解が大事であると考ええる。

本学の自校教育科目「異文化交流」は、学生の自立的な異文化への興味や探求心を膨らませる良い機会であり授業評価アンケートでも高評価であった。研修プログラム等で得た経験や学びが、一歩前に踏み出す勇気と人間愛を備えた医療職者を目指す端緒となれば幸いである。

参考文献

- 1) 法務省 HP 令和元年6月末現在における在留外国人数について（速報値）
http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04_00083.html (2020.7.28)
- 2) 厚生労働省 HP 「医療機関における外国人旅行者及び在留外国人受入れ体制等の実態調査」の結果 <https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000173230.html> (2020.7.28)
- 3) 春海保健大学校 HP <http://www.ch.ac.kr/main/index.php> (2020.9.14)
- 4) 仁済大学 HP <https://www.inje.ac.kr/kor/about-inje/members.asp> (2020.9.14)
- 5) ウェスタンシドニー大学 HP <https://www.westernsydney.edu.au/future.html> (2020.9.14)
- 6) 外国人患者が医療機関受診において経験するコミュニケーション・ギャップ, Kawasaki Ikaishi Arts & Sci., 44: 39-47 (2018)
- 7) 在日外国人が実感した日本の医療における異文化体験の様相, J. Jpn. Acad. Nurs. Sci., 37: 35-44 (2017)